

第1章 山口市の概要

1. 地域の特徴

(1) 位置

山口市は、山口県の中央部に位置し、南は瀬戸内海に面し、東は防府市、周南市、西は美祢市、宇部市、北は萩市、さらに島根県津和野町、吉賀町に接し、東西に46km、南北に59kmの広がりを持ち、面積1,023.31km²を有しています。

(2) 市域の移りかわり

明治22年(1889年)町村制の実施により生まれた山口町は、昭和4年(1929年)には吉敷村と合併し市制を施行しました。小郡町は明治34年(1901年)に、秋穂町、阿知須町は昭和15年(1940年)に町制を施行しました。

山口市は、昭和16年(1941年)には宮野村と合併し、さらに昭和19年(1944年)に、小郡、阿知須の2町、平川、大歳、陶、名田島、秋穂二島、嘉川、佐山の7村と合併し、新たな山口市を形成しました。

昭和22年(1947年)に阿知須町、昭和24年(1949年)に小郡町が分離しましたが、昭和31年(1956年)に鑄銭司村、昭和38年(1963年)に大内町(前身:旧大内村、旧仁保村、旧小鯖村)が合併しました。

徳地町は、昭和30年(1955年)、出雲、八坂、柚野、島地、串の5村が合併して町制を施行しました。

阿東町は、昭和30年(1955年)、篠生、生雲、地福、徳佐、嘉年の5村が合併して町制を施行しました。

そして、平成17年(2005年)10月1日、山口市、小郡町、秋穂町、阿知須町、徳地町の合併により新「山口市」が誕生し、さらに、平成22年(2010年)1月16日に阿東町と合併しました。

(3) 都市機能

本市は、山口県の県庁所在地であり、これまで行政、教育、文化の中心的役割を果たしてきました。県庁や国の行政機関、山口大学、山口県立大学、山口学芸大学、山口芸術短期大学等の高等教育機関、美術館や博物館、山口情報芸術センターをはじめとする文化施設が集積しています。

また、総合病院や福祉施設、大型商業施設の立地により、日常生活面においても近隣市町との結びつきが深くなっています。

さらに、広域・高速交通網が東西南北に走り、県内の主要都市に1時間以内で移動できるとともに、高速自動車道や山陽新幹線、山口宇部空港といった高速交通網との接続の便もよく、広域交流の拠点としての優位性をもつ立地となっています。

(4) 産業構造

本市の産業構造を市内総生産の産業別にみると、サービス業、卸売・小売業、運輸・通信業を中心とした第3次産業が主要産業となっています。また、県庁所在地であることや国の出先機関が立地していることから、行政サービス生産者の割合が高いのも特徴的です。

市内総生産額は、第3次産業の増加がみられる一方で、第1次産業や第2次産業の減少が続いています。

2. 自然環境

(1) 地形

北部の山地から、山口地域は榎野川が、徳地地域は佐波川が、盆地、南部の臨海平野を経て瀬戸内海に流れ込んでおり、阿東地域は阿武川が「名勝長門峡」を経て、萩市より日本海に注いでいます。

また、秋穂地域は瀬戸内海に突出した半島状をしており、阿知須地域には2,86km²の面積を持つきらら浜（阿知須干拓地）が広がっています。

(2) 気象

南北に細長い地形のため、北～中部の盆地地域と南部の海岸地域では若干気候が異なりますが、全域において温暖です。山口県内各地の観測データと山口市（山口測候所）を比較してみると、梅雨期の降水量が多く、冬季（特に1、2月）の気温が低いことから、寒暖の差が大きく降雨量が多いという盆地の典型的な内陸性気候といえます。また、北部に位置する徳地、阿東地域の山間部では、冬季の気温が低く積雪量も多くなっています。

一方、山口市の南部地域では、盆地部に比べ、冬場の気温が高く降水量が少ない瀬戸内型の気候を呈しています。